

バドミントンが地域の架け橋に!

東裏羽球同好会



↑ 力強くスマッシュ!



↑ 同好会のアイドル・そらちゃん

2020年は東京でオリンピックが開催されるスポーツの年。バドミントンは東京オリンピックの正式種目でもあり、性別や年齢を問わずに誰でも楽しめるスポーツとしても近年注目を集めています。今回は地域の和を大切にしながら活動する「東裏羽球同好会」取材しました。お話は同好会を代表して、会長の瀧本英治さんに聞きました。

旧東裏小学校で発足

30年以上も前に、東裏小学校の事務員だった方がバドミントンが上手で、東裏小学校の体育館で地域の人に教えていたのが始まりと聞いています。当時は学校の先生も地域の人と一緒に楽しんでいたようです。現在のメンバーは農家の方がほとんどで、夏場は農作業で忙しく、毎年11月から3月までの

冬期間限定で活動しています。冬休みには子どもたちもバドミントンに参加して、みんなで楽しく過ごすこともあります。

ゆる〜い交流の場

雰囲気^がまったりとし^て堅苦しくな^いことが、この同好会の一番の良さだと思います。開始時間に縛られることなく、みんな仕事や家事がひと段落がついてからぞろぞろとやってきます。バドミントンは2人いれば打ち合うことができるので、出欠にとやかく言う人はいません。活動中も疲れたら休憩して、農業や子どもの成長のことなどをおしゃべりして、地域の人たちの交流の場となっています。このゆるさこそが、自分たちの親の代から30年以上続いている秘訣なのだと思います。

これからも世代を超えて

毎年3月の終わりには同好会の大会を行います。大会の後にはささやかですが打ち上げも行い、一年の活動を終えます。誰もケガをすることなく無事に春を迎えると、「また今年も一年農作業を頑張ろう」という気持ちになります。今後も自分の子どもや孫の代まで、何世代にも渡って活動が続いてくれればうれしいです。

瀧本さん以外にもお話を聞き、どの方も優しく対応していただきました。みんなで楽しく汗を流している姿を見て、バドミントンが地域の人たちの架け橋となることが伝わってきました。今後も末永く、東裏羽球同好会の活動が続いていくことを願っています。

(令和元年12月19日取材)